

学内広報

for communication across the UT



特別記事：平成18年度入学式
・大学院入学式

平成18年度入学式が4月12日（水）に、日本武道館において挙行された。式には3,138人の新入生と、その父母など約5,350人、合わせて約8,500人が出席した。

午前9時50分、運動会応援部による演奏及び東京大学の歌「ただ一つ」のデモンストレーションがあり、10時20分、音楽部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の小柴昌俊特別荣誉教授、藤嶋昭特別荣誉教授、及び経営協議会学外委員の方々がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時40分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コーラルアカデミーにより、東京大学の歌「大空と」の演奏、合唱があった。合唱後、総長が約25分にわたって式辞を述べ、続いて、木畑洋一教養学部長が式辞を述べた。式辞の後、本学の卒業生である野口聡一宇宙飛行士からお祝いのメッセージ（ビデオレター）が放映され、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の演奏、合唱をもって、11時30分に式を終えた。

東京大学は、今から3年前の平成15年3月に『東京大学憲章』を制定し、その前文で、「東京大学は、構成員の多様性が本質的に重要な意味をもつことを認識し、すべての構成員が国籍、性別、年齢、言語、宗教、政治上その他の意見、出身、財産、門地その他の地位、婚姻上の地位、家庭における地位、障害、疾患、経歴等の事由によって差別されることのないことを保障し、広く大学の活動に参画する機会をもつことができるように努める」と謳いました。

東京大学の多様な成員が一同に会する機会はそう多くはありません。卒業式は文系と理系を分けて行っていますので、ある年度の入学者が一同に会するのは、この入学式が最初にして最後です。この唯一の特別の機会に、私は東京大学という場がもつ意味について皆さんにお話ししたいと思います。

東京大学は、明治10年の創立以来129年の歴史を有する日本のなかでも非常に古い歴史を持つ大学です。しかし同時に、私たちは、その時々に応じてつねに新しい時代の課題に取り組んできました。そしてその結果として、世界でも有数のリーディング・ユニヴァーシティとしての評価を内外ともに確立しています。平成16年度から「国立大学法人」という新しい設置形態に変更されましたが、これを機にさらに一層、大きく飛躍を遂げようとしているところです。

東京大学の特色は、文字通りのユニヴァーシティ、つまり、総合大学であることにあります。ユニヴァーシティであるとは、ユニヴァースであることですから、古今東西、人類社会のあらゆる知が凝縮されている「小宇宙」であるということです。自然と人間のあらゆることに関連する最先端の「知」がそこでは育まれているのです。

そのために、東京大学は10学部、15研究科（大学院）、11研究所、21全学センターといった50以上の部局を擁しています。そして、それぞれの場で基礎から応用まで、文科理科を横断した様々な研究教育活動が日々展開されています。学部学生は、大きく括って1万5千人、大学院学生は1万3千人、教授から助手までの教員は4千人あまり、職員も3千人を超えています。この規模の大きさと豊かな多様性こそ、総合大学のエネルギーです。このような巨大で複雑な制度を通して、東京大学は、人類社会の知を幅広く継承し、それを発展させるという大学の根本的な使命を果たそうとしているのです。

この「知」の「小宇宙」に皆さんは今日から、その成員として入ることになります。今日から、東京大学は、皆さんが属する、皆さんの「小宇宙」なのです。もちろん東京大学という

平成18年度東京大学入学式総長式辞



東京大学総長
小宮山 宏

東京大学に入学された皆さん、おめでとうございます。東京大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

今年入学された新入生は、文科一類から理科三類まであわせて、総数3,161名でした。その中には、前期日程入試で合格された方、後期日程入試で合格された方に加えて、外国の学校を卒業した外国人及び日本人を対象とした特別選考入試の合格者、さらには国費外国人留学生などの留学生も含まれています

しかしこれは、入試方法による区別にすぎません。東京大学の学生は、このような言い方では尽くされない多様性を備えています。たとえば、別の指標をとってみますと、今年度の入学者に占める女性の比率は20%で、20年前に比べて2倍以上に増加しています。また出身高等学校の所在地でみると、日本全国すべての都道府県が網羅されています。外国人留学生は、13カ国45名にのぼります。年齢も皆さんが想像しておられるよりもはるかに拡がりがあります。さらに、身体に障害をもつ学生も入学を果たしています。

東京大学へようこそ！——このような多様性に富む方々を迎えることを、私は、総長として、とてもうれしく思っています。

この巨大な組織のどの現場も重要でないものはありません。しかし、私は総長として、あえてそのなかでも、たったいまこの「小宇宙」に迎え入れられた皆さんこそ、なににもまして重要なのだと言いたいと思います。なぜでしょうか。理由は簡単です。それは、皆さんこそ、私たちのこの「小宇宙」の、そしてそれが鏡のように映しだしている人類社会のもっとも遠い「未来」を担う人びとだからです。東京大学という「知」の「小宇宙」のいっさいは、ある意味では、皆さん方が「よりよい未来」を創り出すためにこそあるのです。大学とは「未来の器」なのであり、その大学の願いをもっとも遠くの「未来」へと届かせるのが、皆さん方なのです。

そしてそれだからこそ、私は「知」の「小宇宙」の多様性を受け渡すべき皆さんがまずは多様性に目覚めていただきたいと思います。言うまでもありませんが、たったひとりの存在には多様性はありません。多様性とは、すでにひとりひとりがさまざまに異なった他者のなかに存在していることを意味しています。「未来」とは、ひとりの存在が創るものではありません。それは、他者とともに、共同して創り出すものでなければなりません。私は、東京大学というこの「総合の場」が、皆さんにとって、なによりも多様性の目覚めの場、多様性のエクササイズ場であって欲しいと切に願っているのです。

分かりやすい例をひとつだけ取り上げてみましょう。新入生のなかには、毎年、程度の差はあれ身体になんらかの障害のある学生が何人かいます。目が見えなかったり、車椅子を使用したりします。総長としては、そうした新入生が大きな不自由なく大学生活を送れるかといつも心を配るのですが、現実には、誰が指示するということもなく、クラスの友人たちが教室間の移動を手伝い、エレベーターのない建物では車椅子を持ち上げたり、当番を決めて一緒に移動したりと、自然発生的にサポートする環（わ）ができることが報告されています。目の不自由な学生が入学した時には、点字のサークルが教材の翻訳に大活躍をしました。理科一類にそうした学生が入学した際には、教員も理科実験が出来るように物質の色の変化を音に変換する装置を組み立てたりしました。また、ある時には、初修外国語5万語の電子辞書を点字ディスプレイ上で読みとれるソフトを作ってしまったこともあります。

私は、学生、職員、教員がそれぞれの立場で、しかし自発的に、ほとんど自然のこととしてこのような取り組みを立ち上げることができる東京大学を誇りに思っています。これはけっして障害のある方を助ける、という一方的な関係なのではありません。それぞれが自分という枠を超えて、異なる他者との共同の場を創りあげているということなのです。「未来」が共同のものとして自覚されているということなのです。豊かな大学の「知」が、真に豊かな「未来」を切り開くことができるため

には、かならず人間と人間とのあいだの、しかもけっして同質ではなく、異質な人間のあいだの共同の関係の構築が欠かせません。大学という場合は、「知」の内容だけではなく、そうした根源的な社会性をも学ぶ場であるはずなのです。

東京大学は「世界のリーディング・ユニヴァーシティ」という目標を掲げ、人類社会の公共性に貢献する大学づくりを進めています。21世紀に入って世界の変化の速度はいよいよ激しく、技術と社会、人類と環境、あるいは文化と文化の間の葛藤は一層顕在化の様相を深めています。その一方で、国家の時代は終焉の方向に向かい、世界的な競争が始まるとともに、人類社会という自覚も芽生えています。

このような激動の時代には、多様性という特徴が顕著になります。世界には様々な政治形態が並立し、様々な文化や宗教が競い合い、その間の往き来も活発です。東京大学の場合、戦後間もない新制大学発足の昭和24年（1949年）には、学部の入学者は1800名ほどでしたが、そのうち女性はわずかに9名、留学生はいませんでした。それと較べれば、今のキャンパスは、大変に明るく、また国際色豊かになりました。いったん社会に出てから大学に再び入学される方も増えました。まだまだ不十分な面もありますが、これらの傾向が今後一層深まっていくことと期待しています。大学院も含めて、全世界からの留学生受入の拡充などを推進していきたいと考えています。

「知」の発展を通して人類社会の公共性に貢献するという目標をかなえて行くには、私たちはこうした多様性をこれまで以上に大切にしていかなければなりません。

「知」とは本来、人間を自由にするものです。人と人との自由な交流を促し、活力を与え、様々な制約から人間を解放する根元的な力です。知の創造と活用が、これからの人類社会の様相を決めていくと言って過言ではありません。そうであればこそ、大学は常に社会とともに呼吸し、その息づかいを感じ取ることができるのでなければならず、常に開かれたコミュニティであり続けなければなりません。

大学は、ユニヴァーシティという言葉が示すとおり、人類社会という大きなユニヴァースの発展に貢献することが使命です。現在グローバル化の動きが急速に進んでいますが、グローバル化はともすれば世界が画一化されることと受け取られがちです。しかしグローバル化の動きが、人類の文化や社会の多様性、さらには知の多様性を開花させるように努めるのが、私たちの使命です。多様性は新たな発展の源にある本質的な要素だからです。そのためには、大学という「小宇宙」が均質な閉鎖的な集団ではなく、それ自体多様性に満ち、協力や葛藤を常に経験しつつダイナミックに活動しているのでなければなりません。いまこそ、知の集積の場である大学が、率先して世界や社会に対して自らを開き、新しい交流と発展の核となることを目指さね

ばなりません。

この点にもう少し目を向けてみましょう。他の多くの組織と異なる大学の多様性の特徴は、それが複数の世代から構成されているという点でしょう。すなわち、教える側と学ぶ側です。現在の人類社会の知の総体を担っている教員と、その知を未来に向けて継承していく次の世代という二つの層から構成されています。この二つの層は時として世代間対立の関係にあり、学園紛争などの形で火を噴くこともあります。対立をはらみつつも、一方は必ず他方を必要としており、深い依存関係にあります。若い世代の役割は、これまでの人類社会の知を吸収しつつ、それを新しい世代の文化という袋の中につめていくことにあります。どうか、臆することなく、教員に鋭い質問を浴びせ、皆さんの新鮮な感性でそれを存分に吸収してください。

大学がもうひとつ大切にしているつながりは、同世代の絆（きずな）です。私も若い頃に、若手の研究者が1週間くらい泊まり込んで朝から晩まで徹底的に討論をするグループに参加する機会を得ました。それは、日本人と外国人が半々くらいの合宿形式で、20人くらいが、一人ずつ1時間、自分の研究と関心事を話します。それに対して、もう1時間、他の参加者から様々な角度から質問を受け、徹底的に議論をさせられます。様々な分野からの出席者ですが、そうであればこそお互いの関心事を伝えあい、忌憚のない意見を交わす機会は大変に貴重で、そこで得た刺激が今の私の研究の源になっていると言って過言ではありません。

皆さんが今隣り合って座っている人が生涯の友人になるかもしれません。お互いに挨拶を交わしましょう。お互いの違いを尊重して切磋琢磨することを通して、私たちはたえず問題意識に目覚め、自分たちの使命的に確に答えることが出来るようになりますし、そのような中でこそはじめて豊かな自己が確立されていくのです。

大学という場でのかけがえのない4年間を、活気に満ち、自由で知的なエネルギーに満ちたものにしていく努力を精一杯してください。

私は昨年4月に総長に就任して以来、社会の中心的なリーダーとなる人材を送り出していく機能、すなわち教育がことさらに重要であることを、国内でまた海外で繰り返し訴えてきています。昨年の入学式で私は、「本質を捉える知」、「他者を感じる力」、そして「先頭に立つ勇氣」を持つと、新入生に訴えました。そして、これまでの枠組みにとらわれない斬新な教育の開発、全学のカリキュラムの見直し、教室・図書館やキャンパスの環境整備などを積極的に進めています。そのうちの新しい試みとして、昨年度の冬学期から教養学部で開始した「学術俯瞰講義」について最後にお話しをいたします。

学問は特に20世紀の後半に知識の爆発と言ってもよいほど急速な進歩を遂げました。それ以前とは比較にならないほどの量の知識がもたらされ、今なお刻々増えています。人類社会もかつてそのような急速な進歩を経験したことがなかったわけではないのですが、今回の特徴は、学問領域の極端な細分化を伴ったことです。大学での授業の科目名や学科名を見ていただければ、実に多くの新たな学問領域が近年誕生したということがご理解いただけると思います。問題は、専門化の度合いが深まった結果、領域間の関係が見えにくくなってしまったことです。爆発的に増大した知識をそれぞれの専門家しか使いこなせないという状況は、その知識の利用という観点からすると大変に問題です。教育の場面でも、学生は膨大な知識のごく一部分を学習するだけで4年間を終わってしまう可能性があり、「木を見て森を見ない」状況では真に新しい創造は不可能です。こうした困難を克服する力を育てていくために、昨年度から駒場での教養教育の一部として、「学術俯瞰講義」という講義を開始しました。1年生、2年生に、「知」の大きな体系や構造をわかりやすく提示することによって、それぞれの学生に、自分が学んでいる授業の意義や位置づけを認識してもらおうという試みです。昨年度は「物質」をテーマとして、本日もご出席のノーベル賞受賞者であられる小柴昌俊本学特別荣誉教授にスーパーカミオカンデや素粒子物理学の現在についてお話しをいただくなど、冬学期に13回の横断的な授業を実施しました。今年度はまず夏学期に、「人類社会の共生」をテーマに社会科学の著名な先生方にご講義をいただきます。

大学は今、あたらしい目覚めの中にあります。新しい試みが様々に行われています。

そのような環境をすべての新入生が積極的に活かしてほしいと願っています。この4年間、たえず新しい意識にめざめつつ、ゆったりと、しかし着実に歩みを進めて下さい。21世紀の人類社会に貢献するという大きな課題に向けてともに進んでいくことを、この入学式の機会に訴えて、私の式辞を終えることにいたします。

(平成18年(2006年)4月12日)

教養学部長式辞



教養学部長
木畑 洋一

新入生の皆様、東京大学へのご入学おめでとうございます。またご家族の方々など、新入生の皆様を支えてこられた方々にも、心からお慶びを申し上げます。

私は、新入生の皆様が大学生生活最初の2年間を過ごされる教養学部を代表して、皆様に歓迎の意を表したいと思えます。

教養学部のあるキャンパス、駒場キャンパスは、本郷キャンパス、千葉県の柏キャンパスとならんで東京大学を構成する三つの大きなキャンパスの一つで、自然環境に恵まれています。今の季節には、梅、桜、つつじと次々に咲く花で、駒場キャンパスは鮮やかな色に包まれます。また秋には、銀杏並木がすばらしい黄金色に染まります。駒場キャンパスの一角は、江戸時代には将軍家の御狩場になっており、明治時代には今の東京大学農学部の前身である駒場農学校が置かれていました。そうした歴史を反映して、駒場キャンパスには非常に多くの種類の樹木が見られます。皆様方は、少なくともこれからの2年間、この自然に恵まれたキャンパスで学生生活を送られるわけで、皆様方を駒場に迎えるにあたって、このキャンパスの自然を大事にさせていただきたいということ、を、まずお願いしておきます。

大事にさせていただきたいのは、駒場キャンパスの建物や設備も同様です。建物や設備に関していえば、皆様方は非常に良い時に入学されたということが出来ます。すでにご覧になっていらっしゃると思いますが、皆様方の入学と同時にコミュニケーション・プラザ北館という新しい建物が使われはじめました。広いスペースをもった書店や、スポーツ・芸術活動のための実習室などを備えたこの建物の開館によって、駒場で福利厚生のための環境は大きく改善されました。秋には、食堂が入るコミュニケーション・プラザ南館が完成します。このコミュニケーション・プラザは、4年前に完成した図書館とともに、駒場キャンパスの東側で一つのコーナーを形作っていますが、この新しいコーナーは、駒場キャンパスの発展の良い印です。皆様方は、それができあがる年に入学していらっしゃるわけで、新しい建物、設備を大切に、最大限に活用させていただきたいと思っています。教養学部の自然と建物についてはこれだけにして、次に教養学部で皆様方が学ばれることについて触れたいと思います。これに関しても、皆様方は記念すべき年に入学されたということが出来ます。

皆様方は、この4月から導入された新しいカリキュラムのもとで学び、そして新しい進学振分け制度によって各学部に進学していくことになるのです。

東京大学教養学部が創設されたのは、昭和24年（1949年）です。その時に作られたカリキュラムの枠組みは、小さな変更は加えられながらも平成5年（1993年）まで維持されてきましたが、その年に全面的な改革が施されました。それから13年たった今年から、基礎科目、総合科目、主題科目という科目分類の基本的な枠組みを維持しつつ、その中身を大幅に変更したカリキュラムが実施されることになったのです。また進学振分け制度にも、全ての科類から全ての学部に進学できる全科類枠を導入するなど、新たな仕組みが取り入れられました。

新しいカリキュラムの具体的な中身については、ここで触れる余裕はありません。ここではむしろ、こうしたカリキュラムや進学振分け制度の改革の背後にあつて、教養学部が、そして東京大学全体が一貫してとってきている姿勢について、話してみたいと思います。それは、教養教育を重視するという姿勢です。教養学部ができた時の初代学部長であった矢内原忠雄先生は、「ここで部分的専門的な知識の基礎である一般教養を身につけ、人間として偏らない知識をもち、またどこまでも伸びていく真理探究の精神を植えつけないければならない。この精神こそ教養学部の生命なのである。」と、50年以上前に述べられましたが、東京大学ではその精神が貫かれてきているのです。皆様方は将来、それぞれの専門を深く究めていかれるわけですが、自分が追求している学問が、学問の体系の中で、また社会の中でどのような位置をしめるのかということを知るためには、さまざまな領域にわたる広い視野が必要です。そもそも、自分が全力をあげて追求していくべき専門を見出していく上でも、狭い分野に偏らない知力が必要なのです。視野を広げ、偏らない知力を身につけるということは、もちろん人生の一時期だけの課題ではありません。人は生きている限り、常にそのような努力をしていくべきでしょう。しかし、大学に入学されたばかりの皆様方には、とくにそうしたことが求められています。そうした必要に応えるのが、教養学部における教養教育の中身なのです。

今から十数年前、専門教育を重視する傾向の中で、全国の多くの大学から教養部や教養課程と呼ばれる部門がなくなっていくという事態が進行したことがありましたが、東京大学は、今述べたような教養教育の重要性を唱えつづけ、教養教育を堅持してきました。今年はじめた新しいカリキュラムも新しい進学振分け制度も、そうした姿勢のあらわれです。皆様の間には、自分が関心をもつ領域をはっきり意識している人もいるでしょうし、何に関心をもつたらいいかまだ分からないという人もいます。そのいずれかであるにせよ、教養学部が用意して

いる豊富な授業を十分に活用して、視野を広げていって下さい。それによって、入学した時に考えていた将来の進路が大きく変わる場合には、新たな進学振分け制度が助けになるはずです。

教養学部ではまた、今年からの新たな試みとして、新入生の皆様方に駒場キャンパスで行われている教育、研究、学生生活支援の仕組みなどを紹介するDVDを作りました。皆様のお手元に渡っていると思いますので、これもぜひ活用して下さい。

最後に、教養教育について、私自身が最も重要であると考えている点に触れたいと思います。私は、教養というものは、自分のいる場所がどこであるかを見出す手がかりになるものだと思っています。先に述べたことにひきつけられれば、自分の関心領域が学問の大きな体系の中でどこに位置するかを考えていく手がかりになるもの、自分がやっている学問が自分をどういう場所に導いていくかを考える手がかりになるもの、とよいでしょう。そして、これが重要なところなのですが、自分の場所、自分の位置を知るためには、他者の場所、他者の位置というものを心得なければなりません。教養を深めるということは、他者を知ることによって自分の位置を確認していくプロセスを進めていくことに他ならないのです。

昨年、小宮山総長が発表された東京大学のアクション・プランでは、東京大学の教育についての目標として、「21世紀の地球人としての教養を身につけた品格ある人材の育成」とともに、「本質を捉える知、他者を感じる力、先頭に立つ勇気を備えた人材の育成」という点があげられています。私が今述べたことは、この内のとくに「他者を感じる力」という点に重なりあうものです。これからの世界を支えていく人材である皆様方が、教養学部での学生生活の間に、知的好奇心をはばたかせて視野を思い切り広げ、さまざまな他者に遭遇する中で、自分というものを、自分の位置というものを確認する作業をつづけていき、それからの飛躍に備えていかれることを期待して、新入生の皆様を歓迎する挨拶とさせていただきます。

(平成18年(2006年)4月12日)



平成18年度大学院入学式が4月5日（水）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

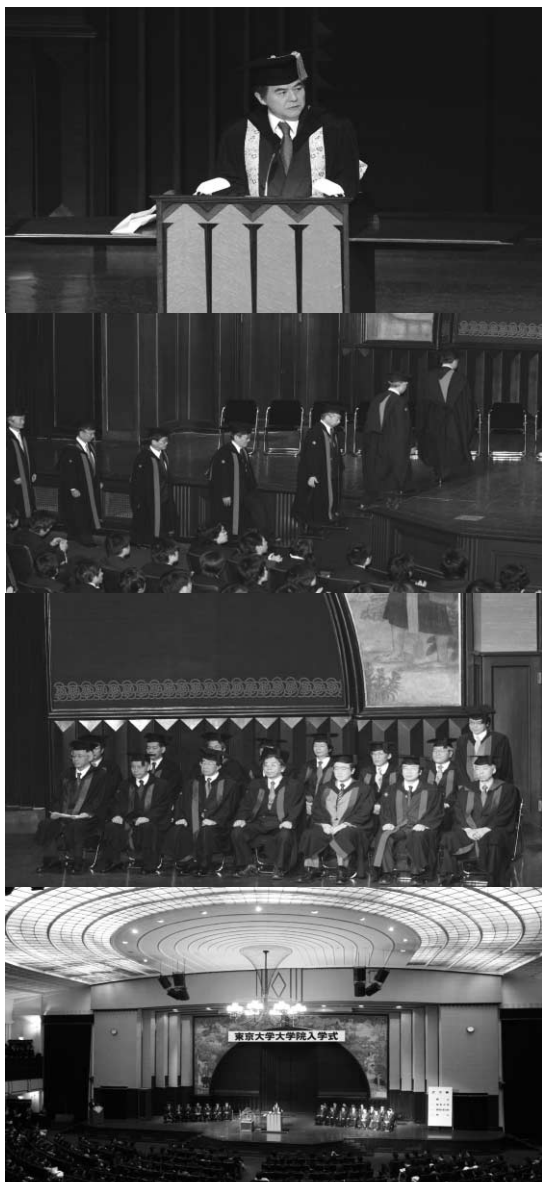
式は、第一部（9時30分開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学系研究科、第二部（11時15分開式）人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部の2回に分けて行われた。

式には、本年度大学院入学者数4,828名のうち約2,900名（第一部約1,650名、第二部1,250名）の新生が出席した。

開式に先立ち、小宮山宏総長はじめ理事・副学長、各研究科長並びに各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、壇上列席者の紹介の後、開式となった。

はじめに総長から約20分にわたって式辞が述べられ、続いて各研究科・研究所を代表して第一部は、岩澤康裕理学系研究科長、第二部は、高橋和久人文社会系研究科長が式辞を述べた後、式は終了した。

なお、新入生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）には、モニターを設置のうえ大講堂での式典の様態を放映し、父母など約1,600名が出席した。



平成18年度大学院入学式総長式辞

東京大学総長
小宮山 宏

東京大学大学院に入学された皆さん、あるいは修士課程から博士課程に進学された皆さん、おめでとうございます。東京大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

平成18年度、東京大学大学院に入学、あるいは進学された皆さんは合計で4,828名ですが、なかには東京大学を卒業された方もいれば、他の大学を卒業された方もいるでしょう。外国から留学して来られた方も、また社会人を経験された方もいるでしょう。いま、こうして壇上から皆さんを前にしますと、そのような様々な経歴をお持ちになった、お一人お一人の熱い志が、私のもとにしっかりと伝わってくる思いがいたします。まさに本日は皆さんにとって、新たな知の世界への冒険の第一ページを飾る、とても大切な日となります。どうかこの東京大学大学院で過ごす学びの期間を、実り豊かな、すばらしい日々にして戴きたいと思います。

さて、皆さん、「一芸に秀でる者は多芸に通ず」という言葉をお聞きになったことがあると思います。あらためてご説明するまでもありませんが、一つの道を究めた人は、ほかの多くの事柄も身につけることがたやすくなる、おのずと見えてくるようになる、というほどの意味です。

ところで、非常に高度に専門化した今日の学問の世界でも、この言葉はまだ通用するのでしょうか。これは私がかつて学部長を務めていた東京大学工学部のケースですが、2003年度の時点で、専門分野の大卒に相当する学科が17、コースになると29、そして

開講した授業は、863科目にものぼりました。工学部を卒業するためには、これらのうち、それぞれの専攻に応じて、42科目から48科目を取得しなければなりません。これは全体863科目の中のたった20分の1にすぎません。学部の段階でこの有り様ですから、本格的に専門の研究を進める大学院ともなれば、どれほど細分化された専門の世界に皆さんが身を置くことになるのかは、想像に難くないでしょう。

さて最初に掲げた質問にもどりましょう。細分化が進んだ今日の学術の世界でも、「一芸に秀でる者は多芸に通ず」と言えるのでしょうか。私は言えると思います。現在の特殊な状況下でもなお、多芸に通ずるためには、まず一芸に秀でることから出発しなければならず、そして多芸に通ずるようなかたちで一芸に秀でることは、十分に可能だと考えます。あるいはむしろ私が強調したいことは、こういうことです。このように学問が高度専門化した状況にあるからこそ、私たちは是が非でも、多芸に通ずるようなかたちで一芸を伸ばしてゆかなければならない。さもないと、研究者は皆、お互い何を研究しているのか理解できない蝸壺の世界に埋もれるか、または、薄っぺらなジェネラリストばかりになって、次世代の後継者を育てられなくなるか、いずれかになるだろうと予想します。しかしながら、一体どのようにすれば、「一芸に秀でる者は多芸に通ず」という状況が、学問の世界において実現するのでしょうか。その実現のためには、皆さん一人一人が、それ相応の学びの心得を強く意識して実践する必要がある—これが私の答えです。では、その学びの心得とは何でしょうか。私が考えるところでは、これからご説明するような三つの要件が、学びの心得の柱をなしています。

まず第一には、自らの専門分野、研究対象を、深く綿密に掘り下げ、徹底的に学ぶことです。今日、学問は文系も理系も一般に細分化が進んでいます。また、それと同時に一部では、文系と理系の境界があいまいになり、従来は無かった新たな知の領域や枠組みが生まれています。世界の学術のフロントランナーたらしとする私たち東京大学大学院では、このような高度専門化、細分化、そして学融合化の傾向はとりわけ顕著です。

ここでごく簡単に東京大学大学院の教育研究組織を一覧しておきましょう。研究科にあたる基本組織が理科系、文科系あわせて15ありますが、これに並んで11の研究所と21の全学センターを擁しています。これらに所属する専任の教員だけで約4,000名にのぼりますが、さらに全国共同利用研究所など東京大学以外のメンバーなども加わって、多様かつ最先端の専門分野に対応する大学院教育を行っています。さらに、法科大学院など、専門的実務者養成のための専門職学位課程も加わりました。質量ともに、まさに世界のトップレベルに位置する総合大学の一つです。

さて皆さんは、これらの教育研究組織のいずれかに所属して、何らかの研究テーマに従事することになります。その研究内容は、多くの場合、とても専門性が高く、特殊化、先端化した性格を帯びることになるでしょう。どうか皆さん、たとえどんなにささやかな研究課題からスタートするにせよ、学問の最前線に立って、未知の世界へと自分の足で踏み込んでいこうとする勇氣と、たくましい知的好奇心を大切に持ち続けて頂きたい。決して広く浅くではなく、まずは一つのことを深く徹底的に学ぶこと。これが学びの心得の第一条件です。

しかしながら、ここにひとつ重大な問題が立ちはだかっています。学問の専門化、先端化、細分化が進み、しかも情報技術、いわゆるITの長足の進歩によって、大量のデータを瞬時に処理する情報交信網が、世界規模で広がり続け、その結果として、私たちの目の前には今や、想像もつかないほど膨大な知識・情報の大海原が、漠として広がっています。

例えば今、インターネットで「環境問題」という語句を、ある検索システムにかけますと、なんと約3,640万件もの情報源にアクセスが可能となります。一人で毎日1,000件ずつアクセスし続けても、全部見終わるのに、36,400日、何と約100年もかかってしまいます。しかも話はこれだけでは終わりません。その100年の間に、「環境問題」に関する知識・情報・データは、日々、めまぐるしく変化、膨張してゆくに違いありません。ですから、「環境問題」の全貌をとらえ分析するための準備作業にすぎない情報収集それ自体が、一人の人間が生涯をささげても、成し遂げることが不可能だということです。

また別の例を挙げれば、かつては一人の学者が、長年にわたって古典の典籍を自ら読み解く中で、こつこつとカードを取り続け、分類・整理した上で、一つの単語、一つの語句の意味・用法を、そのカード集を頼りに明らかにする。これが文献研究の大切な基礎作業でした。しかし今ではそのような面倒な作業は不要です。主要な世界の古典はすでにほとんど、電子テキストとなって公開されており、例えば古典中国語で書かれた仏典群全体の中で「心」という字の用例は、恐らく、とてつもなく大量に存在するでしょうが、コンピューターを使えば、どれもが何の苦労もなく瞬時のうちに引き出すことができます。

人類はまさに未曾有の知識爆発の時代に突入しています。生滅変化が見える可視の世界から、目に見えない素粒子などミクロの物質世界やマクロの宇宙空間、ゲノムに代表される生命現象の神秘に至るまで、あるいは文化遺産、文字資料等々という具合に無限に広がる対象世界を、さまざまな時間的・空間的条件や、ツールの違い、切り口の違い、あるいは文化伝統の違い等々から、切り取られ、写し取られ、描き出されたデータ、情報、知識の無数の断片の集積が、時々刻々と膨張し、かつ絶えずヴァージョンアップを重ねてゆきます。しかし各情報・知

は、たとえどれほど精密であっても、あるいはどれほど沢山集めても、他の情報・知識と組み合わせ、関連づけ、体系づけなければ、問題解決をはかろうとする知の本来のダイナミズムは発揮されません。あるいは現実の世界・社会への効果・効用をもたらさる知識体系、技術体系へと高めることができないはずで、せつかく情報・知識を手に入れても、まったく全体像への見通しを欠いたまま、ジグソーパズルのピースがばらばらの状態で、ごみの山のように積み重なってゆくだけとなります。

したがって、自らの専門を徹底的に勉強すべし、という学びの第一条件に並行して、究めようとする自分の専門知と、他の知識・情報との関連づけを絶えず意識的に行う必要が絶対にあります。これが学びの心得の第二条件です。

では他の知識との関連づけを、どのように行えばよいのか。これは一律に答えるのは難しい問いですが、いろいろな方法が考えられます。ひとつのオーソドックスなアプローチとしては、細分化するに至った学問の歴史をさかのぼり、元の幹を確認したり、その同じ幹から分かれていった隣接の分野の知識と比較する方法が考えられます。そして知識・技術発展の歴史を辿ることで、しばしば、根底にある基本的な思考や原理に開眼して、一気に知識の全体像が見渡せるようなステージに上れることもあります。例えば、部品数が300万にも達する原子力発電所であっても、自転車の前輪部に付いている小さな発電機から光が出る装置と、発電の原理そのものは本質的に同じだと理解することは非常に重要なファクターとなります。こうした「本質を見通す力」は、一朝一夕で得られるものではなく、日頃から各人が意識して育成し、鍛えようとする心構えが肝要です。

このような方法とは別に、解決すべき現実の問題、具体的な課題を軸として、さまざまな知識・情報を統合しようという動機付けも非常に重要でしょう。世界各国の中でも日本は、さまざまな課題が、他国に先駆けて顕在化している国です。化石資源に乏しく人口密度が高いという条件のもとで、環境を保全しつつ、ハイレベルな経済を維持する日本の国民的努力と英知の結集は、来るべき地球社会全体の姿を先取りしているとも言えましょう。このほか少子高齢化社会など深刻な課題が少なくありません。日本は、いわば「課題先進国」でもあります。しかし、悲観するには及びません。エネルギー資源が乏しいというハンディキャップがあったからこそ、エネルギー効率の非常に高い産業モデル、社会モデルを、いち早く世界に向けて日本は示すことができています。「課題先進国」は「課題解決先進国」になればよいのです。ともあれ、課題解決へと向かう強い意思が働くことで、必要な学術成果を総動員しようというベクトルが働き、これまでバラバラだった知識が、一つにつながって、新たな知識を生んだ事例は、これまでも沢山あります。

ところで、このような場合、研究書や論文を読みあさるだけ

でなく、人との出会いがしばしば決定的な意味をもつ、というのが私自身の経験則です。今日のような細分化した専門知が林立する時代には、広い知見をもった先輩の研究者たちから助言を受けたり、専門を異にする人々と自由に議論を交わすこと、つまり「耳学問」というものが、何ものにも代え難い財産となります。膨大な情報を短時間で収集し、処理し、まとめる作業のツールとして、コンピューターほど便利な機器はないので、ともすると研究者は、一人でパソコンの画面に向き合う時間が多くなってしまいます。しかし新たな学知を求める探求の旅は、決して一人旅ではありません。道先案内人の先生や、先輩たちの指導、助言、そして同僚たちとの対話があって、はじめて旅人として一本立ちができるのです。できるだけ多く、人々とふれ合い、議論をすること、これが学びの心得の第三条件です。

そろそろまとめに入りましょう。知識爆発の時代においては、ただ広く浅く学ぼうとしても、情報の海の中におぼれてしまって、何もまとまった学問的成果を生み出せないで終わってしまう可能性が高い。したがって、皆さんはそれぞれの専門分野の最前線に身を置き、研究対象や研究視点を絞り込んで、徹底的に専門知を追求しなければならない。しかしその「一芸」が「多芸」に通じるためには、同時に、その専門知が他の知識とどのような脈絡でつながっているのか、あるいは知識体系全体の中でどのような位置にあるのか、さらには、及ぼさる知的貢献や社会的効果などの全体像と、どのように関連しているのか、という幅広い視点を養わなければならない。そして第三に、人と直接ふれ合う機会を多くすること。以上の三条件がそろった時に、「一芸に秀でる者は多芸に通ず」という言葉がはじめて真実味を帯びるといえます。この、人と人との出会いが重要だということに関連して、この場に多数おられる外国からの留学生のことに触れておきたいと思います。昨年のデータですが、大学院生の総数に外国人留学生が占める割合はすでに約14パーセントにまで達しています。留学生の皆さんは、世界各地の多様な文化を背景にもっています。知の創造という大学の課題にとって、様々な発想が切磋琢磨しあうことはきわめて重要であり、構成員の文化的多様性は貴重な財産です。留学生の皆さんの存在が東京大学の知の営みをより豊かにすること、そして「課題解決先進国」日本にあるこの東京大学が、留学生の皆さん一人ひとりに飛躍の機会をあたえることを切望してやみません。

最後になりますが、本日は多くのご家族やご関係の皆様にもご出席いただいています。東京大学大学院に入学ないし進学した諸君は、本日、私たち教職員とともに、知の探究の旅へと出発します。無事、目的が達成されるまで、どうか、温かくお見守り下さいますようお願いしまして、式辞の結びと致します。

(平成18年(2006年)4月5日)

第一部 理学系研究科長式辞



理学系研究科長
岩澤 康裕

東京大学大学院に入学された皆さん、博士課程に入進学された皆さん、本日はおめでとうございます。ご出席のご家族の皆様方、ご関係の方々、誠におめでとうございます。

皆さん、宇宙の遠い惑星に我々と似た生命が存在しているかどうかのようによく知ることができるのかご存知でしょうか。皆さんが今呼吸している酸素分子が存在しているかどうかは生命の存在の証拠の一つだといわれています。生命体が存在しない惑星では酸素は原子として鉱物などに取り込まれていて酸素分子というガスとしては存在できないそうです。その酸素分子の存在は、基礎科学によって生まれた最先端分光法によって調べることが可能です。その生命ですが、我々人類がどのような進化の過程を経て地球上に存在しているのか今日の思考力を獲得できたのかについては依然として納得できる説明ができません。自然現象の真理を発見したい、社会を豊かにする技術を生み出したいという気持ち、真理を発見したり新しい技術を生み出した時の喜びなど、人類のみが獲得した高度な思考と精神は、身体を構成する小さな分子のどのようなメカニズムによって生まれるのでしょうか。依然としてよく分かっていない神秘の世界です。

私の専門は、触媒科学です。社会の化学プロセスの約8割が触媒の働きによって実現されています。ガソリンも、食用油も、衣服繊維も、医薬や農薬も、インスタント食品の器も多くものが触媒を使って作られています。また、自動車の燃料電池触媒、光触媒など環境エネルギー問題の解決に貢献すると期待されています。触媒は二つのものを引き合わせそれらがうまく反応できるようにするメディエーターです。触媒という言葉は、現在では政治や経済などの世界でも「何々を触媒する」などというように使われています。このように、教科書や新聞にも取り上げられる触媒ですが、その触媒の働きのメカニズムはほとんど分かっていないのです。自然現象の法則は、皆さんが理解していると思っているより分かっていないことの方が遙かに多いのです。

理系大学院生の皆さんは、これまで学びの階段を進んできて、今日から、先輩達の築き上げてきた名誉ある東京大学大学院で、さらに学問の知の階段を昇っていくことに強い熱意と誇りを

持って頂きたいと思います。

人工衛星・ロケットは科学・技術の総合力の結晶といわれます。当時ソ連のスパウトニク人工衛星が打ち上げられ、その後米国でもアポロ11号により月に人間が降り立ちもして、宇宙空間から地球が真に丸いことが人間の目で証拠として報告されました。そのことにより、それまで地球は平板上であると信じて言を曲げなかった欧州の団体がはじめて地球が丸いことを認める声明を出したそうです。科学・技術の革新的進歩は、我々の宇宙観、世界観、物質観をも変えてしまう程の大きなインパクトを与えるものなのです。

今後、地球上では、気候変動や環境問題をはじめ、人類が予測できない不測の事態が起こることも心配されています。皆さんは、理系の大学院で、人類が豊かな文明社会を持続できるように、一方で、人類が予測できないような不測の事態に対応できる確固たる力を育てていただきたい。我々人類は、自然の法則を発見し、文明として現実化し、社会を進化・向上させることに努力する使命を帯びていると私は考えます。

人は文化を求めるものです。現在の経済活動のほとんど全てにかかわる科学技術は個人個人の文化を求める叡智の結晶です。ダイヤモンドやサファイヤなどの宝石の結晶、氷の結晶、塩の結晶など、結晶は周囲の環境によって成長いたします。東京大学の充実した最先端の研究教育環境に身をおいて、理系の大学院に学ぶ皆さんが存分なる力を発揮して大きく偉大な結晶を実現してください。

大学院での研究に大切なのは、「力と勇気と信念」です。力とは、物事の認識力、判断力、実行力などと言われますが、要するに個人個人の感性であって、精神力です。これはある意味でご両親から授かった皆さんの財産であり、東京大学大学院の国際最先端の研究環境で花開くものと期待されます。二番目の勇気ですが、皆さん方に特に期待される勇気は、総長が言われているように先頭にたつ勇気であります。また、三番目の信念は、理想の基になるもので、皆さんには「気高い理想」を持っていただきたい、こころざしを全うしてほしいと思います。力と勇気と信念を持つことは大学院での研究だけでなく社会性を持つことに通じるものです。大学院では知識を得て、見識を高め、さらに胆識を育ててくださるように望みます。

皆さん、大学院で研究を遂行する上でとても必要なものがあります。それは大学院での研究に対する考え方です。つまり「研究観」だと私は思います。研究が順調ばかりではないはずで、むしろ順調に進むことは少ないかもしれません。そのような時、研究観があやふやだと惨憺たる道をあゆむことにもなりかねません。確固とした強固で動かない研究観を持つことが大切だと思います。「気高い理想」を持ってくださるようお願いいたします。やり遂げるという強い精神力が成功に導くと

感じております。個々人の感性、精神力、研究観を総合して、峻厳なる真理の発見、科学技術の発展に立ち向かって頂きたいと希望します。

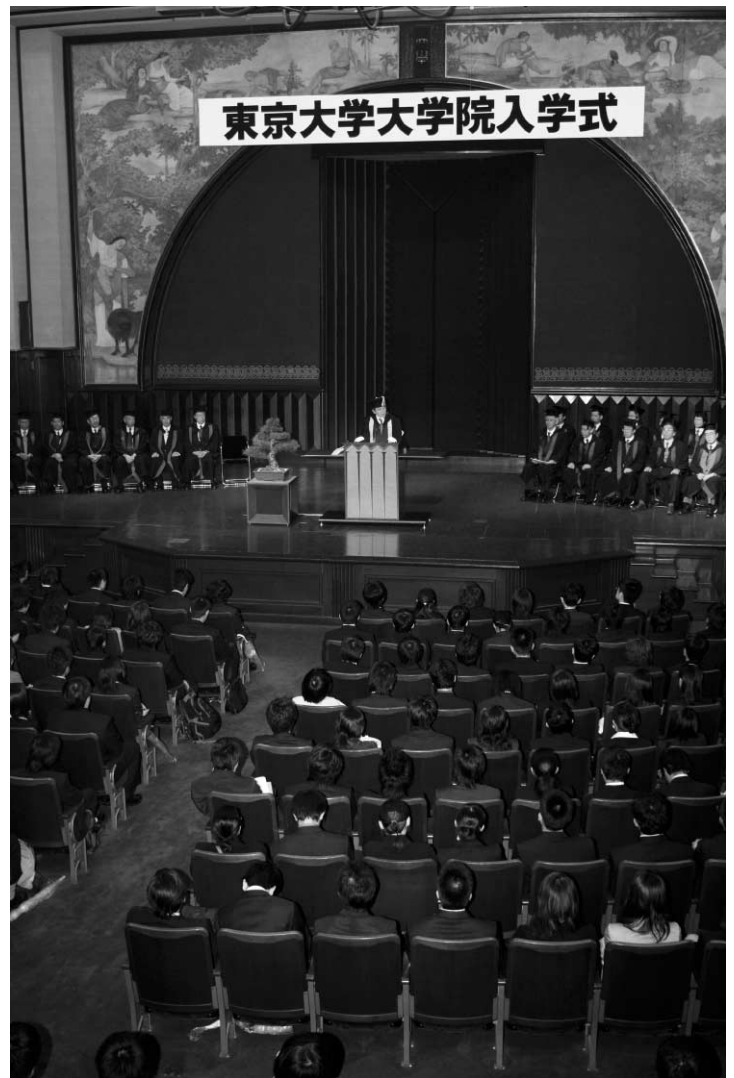
皆さんの中で、これはちょっと大変だから明日やろうとかいう人がいます。明日に考えようと思う人がいます。しかし、誤解を与えてしまう表現かも知れませんが、明日という時間が存在するのでしょうか。寝ておきて明日になったとして、その日はもう今日であって明日ではありません。明日にやろうということはいつまでたっても明日であって何もやらないことと同じなのです。研究には潮の流れに似た潮時、今がその時、という時間があります。気高い感性をもとに誠心誠意の姿勢を養ってください。真理を発見し技術を生み新たな領域を開拓して先頭に立つためにはおのれの精神力を育むことが肝要です。

大学院生諸君、皆さんは何を目的に何を期待して東京大学理系大学院に入学したのでしょうか。一生は一回きりです。心として有意義に毎日を過ごすべきだとおごそかに自戒して頂きたい。研究は、思考の量と質の両者の和の総合生産です。「自らの思考力を育て」、「自らの思考に責任が持てる能力を育て」、「自らの考えを分析評価する力を育て」、思考力と洞察力を高めて欲しいと思います。問題解決の方法を身につけ、未踏の領域を切り開く意気を持ってほしいと願っています。諸君にはそれを社会が求め期待しています。

東京大学大学院が発する先進的情報は未来社会に貢献するための本質的なものであることが求められます。我が国及び人類社会の未来の文明を見据えた一貫性ある俯瞰が不可欠です。理系の大学院に学ぶ皆さん、皆さんは皆さん自身が考えている以上に社会から期待されていることを知り、とまどいを感じるかもしれません。しかし、その期待をしっかりと受け止める覚悟が必要です。その期待に応えるために、理系大学院の最高水準の研究教育環境の中で、「俯瞰的精神」と「ほとぼしる感性」を育んで頂きたいと希望します。

最後に、ご出席のご家族の皆様、ご関係の方々、本日の大学院の学生諸君の新たな門出を祝うと共に、今後を温かく見守って以前にもましてのご支援を賜りましたら幸いです。本日は皆さんおめでとございます。これをもって私の大学院入学式の式辞とさせていただきます。

(平成18年(2006年)4月5日)



第二部 人文社会系研究科長式辞



人文社会系研究科長
高橋 和久

皆さんおめでとうございます、と申し上げていいのでしょうか。なぜなら、ここにご出席のおそらく大部分の方は、心弾む経験となるに違いない学問研究の道を進むにあたって東京大学をその活動の場として、きっと自らすすんでお選びになったのだらうと思われるからであり、「誰もがその願ふところに住むことが許されるのでない」とすれば、こう言ったからといって嫌味に響かないことを祈りますが、この会場に存在していること自体、相当程度に幸せなことではないかと考えるからです。いまお感じになっているはずの幸福を味わえるうちに味わえるだけ味わって、今後思いもよらぬ困難な状況に直面したときに、怯むことなくそれに立ち向かうなり見事にそこから身を躲すなり、いずれにしてもそれほど見苦しくなく身を処すことのできる精神と肉体を準備していただきたいと思います。

そう申し上げれば、わたしの激励の気持ちを込めた式辞は事実上終わりです。ここで「簡潔さこそ智慧の核心」とでも口走って去るのが麗しいというものでしょう。ところが生憎、わたしにはそれだけの度胸がない。そのためにこうやってぐずぐずしているのですが、まさに見苦しい身の処し方と言うべきです。したがって、以下に連ねる言葉は反面教師によるほぼまったくの蛇の足であるとあらかじめお詫びを致します。どうやらこのような席で式辞を述べるということは、わたしにとっては思いがけず目の前に立ちだかった困難な局面の典型らしいのです。こうした事態にうまく対処できない理由は自覚しているだけでもいくつか列挙できるような気が致しますが、お話しているうちに自覚できていない理由も露呈されることをひそかに期待しつつ、すぐに思いつく具体的な理由について一言申し上げます。それは、かつてわたし自身の過ごした大学や大学院時代の経験が、現在、修士課程、博士課程で学ぼうとする皆さんを待っている経験とどのような関係や距離にあるのか、わたしに測定できていないという事実に関わっているようです。嫌な言葉ですが、もう少し「一般化」して言い換えますと、わたしが色々なことを感じ、考え、評価するときに、意識的、無意識的に参照しているはずの枠組みが皆さんにとってどこまで

有効であるのか、判断がつきかねているということに他なりません。そうした判断もできない人間、或いは自分の思考の準拠する座標軸が相手に対しても有効だと信じられない人間は教師として失格であるという意見が聞こえてきそうです。しかしそうした意見は反面教師にとってすら不都合ですから耳を貸さないことに致します。そしてその代わりに、自分の抱え持ったものとは異質の準拠枠への敬意を忘れないでほしいと皆さんに訴えてしましましょう。ここで申し上げているのは、いわゆる考え方の違い、意見の相違といったものでは必ずしもありません。例えば保守的な考え方と革新的な考え方という区分があります。そしてこの二つはたしかにある論理階型において対立関係にある。しかし両者の間では対話が比較的容易であり、互いを理解することも可能でしょう。最近守旧派などという言い回しが流通しているせいか、「保守的」という日本語にはどこか否定的なニュアンスがついてまわるようですが、車に保守点検は欠かせないでしょうし、本当に革新的な乗り物が誕生すると、最初に乗るのは少しばかり勇気が要りそうところからも明らか通り、保守そのものが悪いわけではないし、まして犯罪的なわけでもない。保守的な考え方にしても、現在の状況に不備があるという認識を持っているという点では、革新的な思想と大差ないのかもしれないのです。その不備を解消するための変化変革の道筋を考えると、現在の不備をどう評価するか、或いは、現在の状況がもたらしている不備を解消するはずの改革が生み出すかもしれない新たな不満をどう評価するか、で意見が分かれる。そういうことなのではないかと思えます。この場合、両者は対立しながらもどこかで同一の参照の枠組みを共有していると言えるでしょう。

わたしの申し上げたい異質の準拠枠への敬意というのは少し違うような気がします。比喩的に言うなら、現在の状況に見られる不備、感じられる不満、未知のものや説明されない美への不安などを、わたしたちは往々にして普遍のものとして設定し、それを解決、解消するにはどうしたらいいかを追求することが当然であると考えがちだけれども、準拠枠が異なれば問題設定がまったく違ってくるかもしれないということです。大袈裟な言い方になりますが、わたしたち——って誰？——が自明の前提とするグローバリゼーションに代表されるような進歩概念に燃料を補給してきた文明の担い手が、地球上に万遍なく存在してきたことはおそらくこれまでなく、したがって、わたしたちの持っている参照の枠組みは、言葉の素朴な意味で「グローバル」なものとは限らないかもしれないという可能性をつねに意識すべきではないか、ということです。

これを弱者の論理と強者の論理という二分法に矮小化して了解するのは比較的簡単です。しかし、マジョリティによるマイノリティ理解はしばしば自分にとって都合のいい同化、同質化作用を伴っているのではないかと、たまには反省してみるのも

悪くない。同質化とは、自らの準拠枠は異質のものを取り込めるという自信のもとに、ひたすら自分の栄養とするためだけに都合よくそれを流用、盗用することを意味します。自分とは異なる感覚や認識の枠組みへの敬意は、自分とは何か異質なものと出遭ったときに最初に感じたに違いないざらざらした違和感を、前頭葉の操作によって安易に解消したりせず、想像力の欠如とは欠如を想像できないことであると思ひ定めて、しばし謙虚にそれと付き合ってみるところから生まれるように思います。たしかにそうした複眼は人を前に進ませる自信を突き崩すように働きかねない。そうすると身動きが取れなくなる。ですから、複眼になるのは、耳の周りを飛んでいる羽虫の音が気になって眠れない夜だけでいいのかもしれません。しかし、眠れない夜に複眼になったとき見るべきは現在と未来ばかりではありません。文明がここ数百年の間に格段の進歩、大幅な変化を遂げたとして、人がどれほど進歩、変化してきたのかを考えると、どんな気分になるのが適切であるのか分からなくて困った気分になります。そう考えると、互いに大きくずれるものでありながらも、準拠枠のある部分を人は共有して生きてきたということになるのでしょうか。そうなのかもしれません。わたしは所謂英文学を研究していることになっている人間ですが、400年も前のシェイクスピアの芝居を見たり、読んだりすると、当時のイングランドの観客と笑いと涙とをいくらかは共有できるように思います。「いくらか」という留保の意味は繰り返しません。ともあれ、おそらくかれらもそうであったように、わたしも頻出する地口、語呂合わせに笑います。しかもそういう瞬間が嫌いでないのはわたしに限らないようです。

言葉の機能が感情や思想の伝達であるとするなら、この種の言葉遊びはその機能に直接の貢献はしない。むしろ駄洒落によって論理の展開は停滞し、ときには論理が破綻すらします。それなのにわたしたちは相も変わらずそれを愉しむ。それはどこかで不倫に似ている、と申し上げたら問題でしょうか。言うまでもなく、現実に不倫を愉しんではいけません。皆がそんなことをしたら、きっと社会の発展、進歩はなくなり、何かが破綻するでしょう。しかし駄洒落という言葉の不倫——本来同じベッドに入ってはいけない言葉同士が重なり合う——を愉しむ悪癖から人が自由になることは難しいらしい。中世以来、不倫を描く文学が絶えないことにもそれは伺えます。しかもこれは人が克服できない悪癖のどうやら一例に過ぎません。わたしたち「現代人」は過去の人々の感じ方、考え方を卒業したとはとても言えないことを歴史は教えてくれます。文明が時間の経過とともにどれほど変化、発展しても、人の賢さや愚かしさの度合いが数百年の懸隔をおいてもなお大して変わらないのなら、現在を生きる多様な人々の多様な価値観に敬意を払うと同時に現在の視点からは愚かと断罪することが比較的容易に見える過去

の人々の営みに対しても、かれらの息遣いを感じようとする謙虚な視線を向けたいものだと思います。

蛇は大体細長いものですが、謙虚、謙虚と繰り返しているうちに、蛇の足までが長くなってしまいました。申し訳ありません。すでにお気づきと思いますが、謙虚を声高に唱えるのは傲慢なことです。傲慢ついでにわたしのメッセージを一言で纏めましょう。それは、晴れて本日入学式をお迎えになった皆さんには、これから、ゆるぎない自信ではなくて、ゆるぎあるもしくはゆるぎのある自信を持って学んで頂きたいということです。いや、これは流石に傲慢の度が過ぎるといふもの。言い直しましょう。今後、研究が順調に進んでいる間はわたしの今日の発言はすっかりお忘れください。しかし、万が一、研究上の迷いや不安から、自信のゆるぎ、ゆれ幅が大きくなりすぎて、自信喪失に陥りそうになるときに来ないともかぎりません。そんなときには自己愛に満ちたある研究科長の呑気な言葉を思い出して、いくらかでも元気になって頂ければこの式辞は目的を達することになります。しかしもちろん、できるだけ多くの方の脳裏からわたしの発言が今後ずっと消えたままであるように祈って、激励の言葉といたします。

(平成18年(2006年)4月5日)



NEWS

一般ニュース

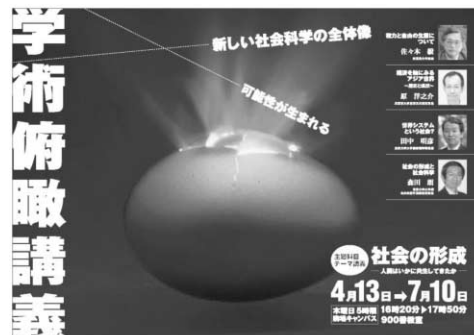
教育企画室

「学術俯瞰講義」第二弾：「社会の形成」の開講

4月13日より、駒場キャンパス・900番教室において、学術俯瞰講義第二弾が始まった。初回は佐々木前総長による「権力と自由」に関する講義であった。ここでは、学術俯瞰講義の目的・意義、今シリーズ（平成18年度夏学期）の講義内容等について紹介する。

1. 学術俯瞰講義とは

今日、学術の先端においては、旧来の学問領域の融合化により新たな学際領域が生まれるとともに、学問分野の細分化が進んできている。このようなダイナミックな学術の進展の結果として、一つひとつの先端学問分野が他の分野とどう繋がり、より広い学問領域の中でどのような位置にあるのかを把握することが難しくなっている。「学術俯瞰講義」は、このような状況のもと、小宮山総長の発案により平成17年度冬学期から駒場Iキャンパス（教養学部）で開始された1、2年生向けの新しい講義（主題科目「テーマ講義」）である。「学術俯瞰講義」は、現在急速に広がりつつある「知」の全体像を提示し、一つひとつの学問研究が互いにどのような関連にあり、全体としてどのような構造になっているかを理解してもらった内容となっている。昨年度冬学期は、「物質の科学—その起源から応用まで—」が開講されたが、今学期は、第二弾「社会の形成—人間はいかに共生してきたか—」を開講し、社会科学を横断する斬新な講義を展開する。



2. 講義の公開

「学術俯瞰講義」は、前期課程の正規の授業科目として開講されるものであり、他の科目と同様に一般には公開しない。しかし、世界中のどこからでも本学の高度な教育活動の成果を共有することができる「知の開放」プロジェクトの一環として、既に先学期の「物質の科学」のコンテンツは、UT OCWで公開されている。

■UT OCW（東京大学オープンコースウェア）

<http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>

また「iTunes ミュージックストア」からダウンロードして、携帯音楽プレイヤーで気軽に閲覧することもできる。今学期以降の「学術俯瞰講義」も順次そのような形で公開される予定である。

3. 平成18年度夏学期「社会の形成—人間はいかに共生してきたか—」

開講場所 教養学部900番教室

開講時限 木曜日5時限（16:20～17:50）

コーディネータ：森田朗教授（東京大学大学院公共政策学連携研究部長）

現代社会は、国際化、情報化、少子高齢化など複雑な課題に直面している。今後平和で豊かな社会を形成していくためには、こうした課題に取り組み解決していかなくてはならない。政治、経済、社会、歴史などを対象とする社会科学は、複雑な社会現象を解明し、課題を解決するための多くの理論や知識を蓄積してきた。しかし、他方で、学問領域が細分化し、私たちが直面している現象をトータルに理解することが難しくなっていることは否めない。各学問領域の研究が、現実の社会現象を理解し、課題を解決する上でどのように役立つのか。そもそもそれぞれの学問が社会現象をどのように捉え、解明しようとしているのか。またこれまで社会における人間がどのように捉えられ、どのような理念に基づいて社会が形成されてきたのか。こうした各学問領域の最先端の知識と現実の社会との結びつきを、これから多様な学問領域においてより高度な知識を学ぼうとしている学生諸君に対し、人類がいかに社会を形成し共生してきたかに焦点をあてて、わかりやすく解説する。



講義を行なう佐々木毅前本学総長

1) 「権力と自由の生態について」

佐々木毅 (前東京大学総長)

●第1回 4月13日 (木)

権力／自由の相互規定関係

●第2回 4月20日 (木)

政治権力の制度化～立憲主義をめぐる～

●第3回 4月27日 (木)

政治権力と参加～民主主義をめぐる～

●第4回 5月11日 (木)

政治権力と境界線～主権国家をめぐる～

【概要】 政治現象を理解する上で欠かせないのが権力の理解である。権力現象は複雑多岐にわたるが、それは人間の自由の現われと表裏一体の関係にある。政治権力の誕生はその中の着目すべき独特の現象であることを念頭に、その生態の現代にまで及ぶ基本的特性を把握する。

2) 「経済を軸にみるアジア世界 歴史と現状」

原洋之介 (元東京大学東洋文化研究所長)

●第5回 5月18日 (木)

アジアの多様な生態と歴史の構造

●第6回 5月25日 (木)

大文明圏 中国とインド

●第7回 6月1日 (木)

周辺文明圏 東南アジア

●第8回 6月8日 (木)

21世紀における日本とアジア

【概要】 アジアには多様な生態系をもった地域があり、古い時代からその間を繋ぐ交易活動が盛んであり続けている。この講義では、商品の取引という視点からアジアの歴史と現状を大きく俯瞰することを通じて、経済社会の多様な成り立ちと、それらの共存の条件を探っていく。

3) 「世界システムという社会？」

田中明彦 (東京大学情報学環教授)

●第9回 6月15日 (木)

世界システムについてのさまざまな見方

●第10回 6月22日 (木)

政府のない社会における共生？

●第11回 6月29日 (木)

近代世界システムと21世紀の世界システム

●第12回 7月6日 (木)

世界システムの中の地域化——東アジアという事例

【概要】 国境や民族の境を超える人々の相互作用は、「社会」を形作るのだろうか。そのような「大きなシステム」にはどのような特徴があると考えられてきたのだろうか。一般的に政府が存在しないとき、人々はどうやって共生するのだろうか。21世紀の世界は、これまでの世界と比べて、何が変わってきたのか。現在の東アジアの動向を、どのように理解したらよいか。人文社会科学のさまざまなアプローチを検討しつつ、これらの問題を考える。

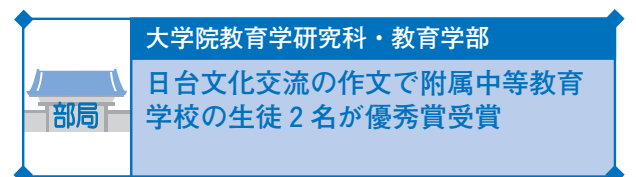
4) 「社会の形成と社会科学」

森田朗 (東京大学大学院公共政策学連携研究部長)

●第13回 7月10日 (月)

共生のメカニズム——俯瞰講義を俯瞰する——

【概要】 3人の先生方による12回の講義を総括して、社会現象を異なる学問的切り口から見た像を合成し、立体的な全体像を示すことを試みる。そして、社会科学の概念や理論というツールを用いて、現実の課題をどのように分析・理解し、解答をみいだすべきか、その可能性と学問的考察の魅力について論じる。



フジサンケイビジネスアイ主催の「第3回日台文化交流青少年スカラシップ作文部門」で、全国556点の応募作品の中から審査の結果、日本・台湾交流への熱き思いを語った本校1年生(現2年生)の角健士君と関野安奈さんの2人の作文が優秀賞を受賞した。また、1年生(現2年生)の浜脇裕太君の作文も佳作となった。なお、もう一人の優秀賞受賞者は、他校の高校3年生であった。角君と関野さんには、副賞として「台湾研修旅行」が贈られた。3月23日に東京の台北駐日経済文化代表處で表彰式が行われた後、そのまま成田から台北へ行き、3月29日まで6泊7日の行程で、台湾の行政院新聞局、台湾師範大学附属高級中学、東呉大学、奇美博物館、故古博物館、二二八祈念館、10101ビル、中正紀念堂、自由時

報、淡江大学、野柳海岸などを訪れた。また、李登輝前総統を表敬訪問して李氏のサインもいただいた。角君は、「国が違い言葉も違うので出発前は心配したが、台湾の人が暖かく迎えてくれてうれしかった」という感想をもち、関野さんは「国立台湾師範大学附属高級中学で同じ中1の生徒たちと一緒に学べたのが良かった」と述べている。2人とも春休み中に貴重な経験することができた。



角健士君・関野安奈さん・浜脇裕太君（左より）

大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校平成18年度入学式行なわれる

4月7日（金）、教育学部附属中等教育学校において、平成18年度入学式が行なわれ、第61回生120名が迎えられた。金子元久教育学部長、吉野正巳学生部長、江原勉教育学部事務長、その他の来賓の方々にご出席いただき、管弦楽部の快い演奏の中での温かな入学式となった。



祝辞を述べる金子元久教育学部長

衛藤隆学校長は、「失敗を恐れずにそこから学び謙虚に他の人の意見を受け入れ、自主的で自立した人間になってほしい。一人一人豊かで思い出深い6年間を送ってもらいたい」と祝辞を述べた。

金子元久教育学部長からは、「教育の世界が大きな転換点を迎えているが、本校がその新しい方向性の一つのモデルとなっている。保護者にも本校の教育への理解と協力をお願いしたい」と心強い祝辞をいただいた。

宇宙線研究所

吉野正芳文部科学大臣政務官、スーパーカミオカンデを視察

吉野正芳文部科学大臣政務官は4月17日（月）、岐阜県神岡町にある東京大学宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設のスーパーカミオカンデがほぼ全面復旧したことに伴い同施設を視察された。スーパーカミオカンデは、平成13年11月の事故により観測能力が落ちていた。



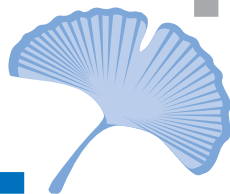
SK入り口で鈴木所長の説明を受けられ、質問される吉野政務官。左から、鈴木所長、吉井研究支援係主任、横井稔秘書官事務取扱、吉野政務官、小桐間学術機関課研究調整官

政務官は、坑内で鈴木洋一郎宇宙線研究所長、黒田和明副所長、中畑雅行神岡宇宙素粒子研究施設教授らの歓迎を受け、鈴木所長から施設の概要説明を受けられたのち、スーパーカミオカンデ水槽の上面からゴンドラに乗り、復旧した水槽内の光電子増倍管などをご覧になった。「ニュートリノ研究の成果が社会に貢献できるか?」といった質問から量子力学、天文学の分野まで熱心に質問されていた。その後、神岡地下で展開されているいくつかの地下実験のうち、将来の重力波望遠鏡の試験機の実験現場をご覧になり、日本のレーザー技術、鏡の高性能化に驚き、興味深く質問をされていた。地下で行われているニュートリノなどの最先端の『宇宙観測』実験に理解を深められた視察であった。なお、政務官視察に際して、小桐間学術機関課研究調整官、吉井研究支援係主任、横井稔秘書官事務取扱らが随行した。



ゴンドラで水槽内部へ降りられる吉野政務官。左から横井稔秘書官事務取扱、吉野政務官、鈴木所長

キャンパス ニュース



キャンパス

学生部

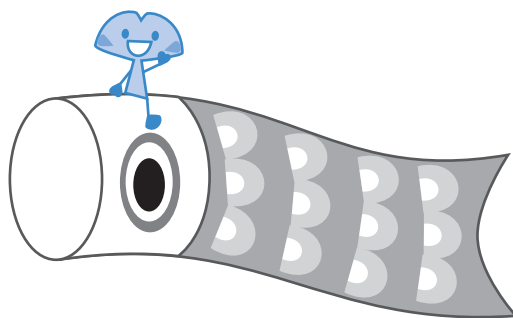
平成18年度入学者数、決まる

平成18年度新入生の人数は次の通りである。

| 科 類 | 入学定員 | 合 格 者 数 | | | 入 学 辞退者数 | 入 学 者 数 | 募 集 人 員 との差 | 定員外の入学者数 | | 入学者総数 |
|------|------------------|------------------|---------------|------------------|-------------|------------------|----------------|-------------|---------------|------------------|
| | | 一般選抜 | 特別選考 (第2種) | 合 計 | | | | 国 費 留学生等 | 特別選考 (第1種) | |
| 文科一類 | 415 (415) | 416 (416) | 9 (5) | 425 (421) | 1 (0) | 424 (421) | +9 (+6) | 4 (4) | 1 (1) | 429 (426) |
| 文科二類 | 365 (365) | 366 (367) | 3 (4) | 369 (371) | 0 (1) | 369 (370) | +4 (+5) | 2 (2) | 4 (3) | 375 (375) |
| 文科三類 | 485 (485) | 489 (489) | 4 (4) | 493 (493) | 2 (1) | 491 (492) | +6 (+7) | 6 (8) | 2 (0) | 499 (500) |
| 理科一類 | 1,147 (1,147) | 1,170 (1,171) | 3 (5) | 1,173 (1,176) | 3 (1) | 1,170 (1,175) | +23 (+28) | 16 (22) | 5 (5) | 1,191 (1,202) |
| 理科二類 | 551 (551) | 569 (569) | 5 (3) | 574 (572) | 2 (1) | 572 (571) | +21 (+20) | 2 (0) | 3 (3) | 577 (574) |
| 理科三類 | 90 (90) | 90 (90) | 0 (0) | 90 (90) | 0 (0) | 90 (90) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 90 (90) |
| 合 計 | 3,053 (3,053) | 3,100 (3,102) | 24 (21) | 3,124 (3,123) | 8 (4) | 3,116 (3,119) | +63 (+66) | 30 (36) | 15 (12) | 3,161 (3,167) |

(注) 1. ()内は、昨年度を示す。

2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工学部留学生を含む。





教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

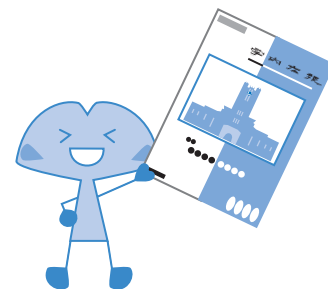
平成18年度進学指導担当教員名簿

平成18年4月現在

| 学部 | 進学指導担当学科 | 職名 | 氏名 | 連絡先（内線） | |
|--------|-----------|-----------|-------|---------------|-------|
| 法 | 全 類 | 教授 | 馬場 康雄 | 23219 | |
| 医 | 医学科 | 教授 | 栗原 裕基 | 23495 | |
| | 健康科学・看護学科 | 教授 | 數間 恵子 | 23506 | |
| 工 | 社会基盤学科 | 助教授 | 中井 祐 | 26134 | |
| | 建築学科 | 助教授 | 西出 和彦 | 26168 | |
| | 都市工学科 | 教授 | 古米 弘明 | 26239 | |
| | 機械工学科 | 教授 | 荒川 忠一 | 26438 | |
| | 産業機械工学科 | 助教授 | 村上 存 | 26327 | |
| | 機械情報工学科 | 教授 | 廣瀬 通孝 | 26376 | |
| | 航空宇宙工学科 | 教授 | 李家 賢一 | 26595 | |
| | 電気工学科 | 助教授 | 古関 隆章 | 26676 | |
| | 電子情報工学科 | 助教授 | 苗村 健 | 26668 | |
| | 電子工学科 | 助教授 | 池田 誠 | 26661 | |
| | 物理工学科 | 教授 | 土井 正男 | 26821 | |
| | 計数工学科 | 教授 | 杉原 正顯 | 26955 | |
| | | | 教授 | 満洲 邦彦 | 26880 |
| | | マテリアル工学科 | 教授 | 渡邊 聡 | 27135 |
| | | 応用化学科 | 助教授 | 河野 正規 | 27204 |
| | | 化学システム工学科 | 助教授 | 大久保達也 | 27348 |
| | | 化学生命工学科 | 教授 | 小宮山 眞 | 55200 |
| | システム創成学科 | 教授 | 須賀 唯知 | 26491 | |
| 文 | 全学科 | 助教授 | 鈴木 淳 | 23785 | |
| 理 | 数学科 | 助教授 | 辻 雄 | (駒場・数理) 47036 | |
| | 情報科学科 | 教授 | 辻井 潤一 | 24098 | |
| | 物理学科 | 教授 | 宮下 精二 | 24192 | |
| | 天文学科 | 教授 | 尾中 敬 | 24261 | |
| | 地球惑星物理学科 | 教授 | 日比谷紀之 | 24303 | |
| | 地球惑星環境学科 | 教授 | 松本 良 | 24522 | |
| | 化学科 | 教授 | 長谷川哲也 | 24353 | |
| | 生物化学科 | 教授 | 深田 吉孝 | 24381 | |
| | 生物学科（動物学） | 教授 | 岡 良隆 | 24438 | |
| | 生物学科（植物学） | 教授 | 福田 裕穂 | 24461 | |
| | 生物学科（人類学） | 講師 | 井原 泰雄 | 24483 | |
| 農 | 一類 | | | | |
| | 応用生物学専修 | 教授 | 岸野 洋久 | 25066 | |
| | 環境生物学専修 | 教授 | 田付 貞洋 | 25060 | |
| | 緑地環境学専修 | 助教授 | 大黒 俊哉 | 25049 | |
| | 生産生物学専修 | 教授 | 田付 貞洋 | 25060 | |
| | 二類 | | | | |
| 生命工学専修 | 助教授 | 若木 高善 | 25152 | | |
| 生命化学専修 | 講師 | 三坂 巧 | 28118 | | |

| 学部 | 進学指導担当学科 | 職名 | 氏名 | 連絡先(内線) |
|--------------------|-------------------------|-------|------------|------------|
| 農 | 三類 森林生物科学専修 | 教授 | 鈴木 雅一 | 25214 |
| | 森林環境科学専修 | 助教授 | 龍原 哲 | 25201 |
| | 森林資源科学専修 | 〃 | 〃 | 〃 |
| | 四類 水圏生命科学専修 | 教授 | 古谷 研 | 25293 |
| | 水圏環境科学専修 | 〃 | 〃 | 〃 |
| | 水圏生産科学専修 | 〃 | 〃 | 〃 |
| | 五類 比較農業・経済学専修 | 助教授 | 木南 章 | 25316 |
| | 開発政策・経済学専修 | 教授 | 泉田 洋一 | 25463 |
| | 六類 地域環境工学専修 | 教授 | 大政 謙次 | 25340 |
| | 生物システム工学専修 | 教授 | 蔵田 憲次 | 25353 |
| 七類 環境共生システム学専修 | 教授 | 太田 正光 | 25248 | |
| | 植物資源プロセス学専修 | 助教授 | 松本 雄二 | 25262 |
| 八類 獣医学専修 | 助教授 | 金井 克晃 | 25409 | |
| 九類 フィールド科学専修 | 教授 | 井出 雄二 | 25490 | |
| | 国際開発農学専修 | 教授 | 黒倉 壽 | 27500 |
| 十類 動物生命システム科学専修 | 助教授 | 田中 智 | 25372 | |
| 経済 | 経済学科 | 助教授 | 大橋 弘 | 25511 |
| | 経営学科 | | | |
| 教養 | 超域文化科学科 | 教授 | 北川 東子 | (駒場) 46344 |
| | 地域文化研究学科 | 教授 | 石田 勇治 | (駒場) 46340 |
| | 総合社会科学科 | 教授 | 後藤 則行 | (駒場) 46473 |
| | 基礎科学科 | 助教授 | 前田 京剛 | (駒場) 46747 |
| | 広域科学科(広域システム) (人文地理) | 助教授 | 増原 英彦 | (駒場) 46679 |
| | | 助教授 | 松原 宏 | (駒場) 46254 |
| | 助教授 | 丹野 義彦 | (駒場) 46265 | |
| 教育 | 総合教育科学科 | 教授 | 金森 修 | 23963 |
| 薬 | 薬学科 | 教授 | 松木 則夫 | 24780 |

備考：連絡先電話番号 本郷(ダイヤルイン) 5841- (内線番号の下4ケタ) 駒場(ダイヤルイン) 5454- (内線番号の下4ケタ)
駒場・数理(ダイヤルイン) 5465- (内線番号の下4ケタ)
例) 内線20000の場合 → 5841-0000





第7回「6月、物の買い方が変わります」

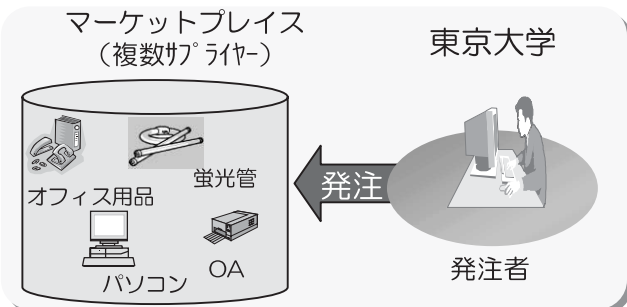
マーケットプレイスの導入に向けて

東大では数知れない種類の物品が毎年度数百億円の規模で購入されています。もちろん、全学でたった1個しか購入されないような特殊なものもたくさんありますが、非常に大量に購入される「汎用品」も無数にあります。これまでは、紙とか重油といった特定の品目を除いて、これらの全てが部局単位、あるいは部局の中でもさらに細分化された単位で必要となるつどバラバラに購入されてきました。

バラバラに購入される結果として、全学ではいくら大量に買ってもスケールメリットは発揮されないままでした。また、小口の購入となるとどうしても特定の業者まかせの傾向に陥りがちで、業者間の競争原理も機能しようもありません。さらにそんな中で、前時代的な「御用聞き」スタイルの販売方法が生き残ってきたといえます。

昨年夏、調達本部では本部内の文具・事務用品について、コンペを通じてサプライヤを1社に絞るとともに、ウェブ発注への切り替えを実施しました。ウェブ上にサプライヤが示すカタログから品物を選択して発注する方式です。半年あまりの試行から、1社のカタログではどうしても品目に限界があること、1社が全品目にあたって最安値とは限らないといった問題点が浮かんでまいりました。

これを踏まえ、文具・一般雑貨、OA・パソコン用品などの汎用品調達改善の全学展開にあたっては、複数の業者が集う東大専用の「マーケット」を形成する方式「バイヤ（東大）主導マーケットプレイス方式」を採用することとしました。このシステムでは、学内の発注者は、東大自身が公募・選定した複数のサプライヤがカタログに掲げる東大向け特別価格をパソコン画面で比較しながら最も有利なものを選択できる仕組みです。



マーケットプレイス方式は、6月1日全学一斉オープンを目途に、現在急ピッチで準備が進められています。今回はスペースの関係で、この方式にたどり着くまでの経緯とあらあらの説明にとどめましたが、本誌の次号で再度詳細に取り上げる予定ですので、ぜひお読み下さるようお願い致します。

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

コミュニケーションセンターだより No.16

■天文学教育研究センター 木曾観測所シュミット乾板展示スタート!

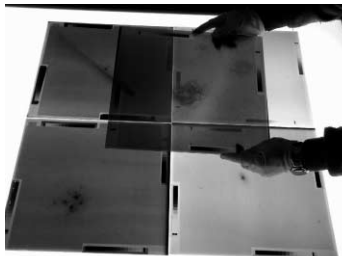
コミュニケーションセンターの展示コーナーにおきまして本学天文学教育研究センター木曾観測所のシュミット望遠鏡で撮影した「ばら星雲」と「アンドロメダ銀河」の乾板（複製）の展示をスタートいたしました。

東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター木曾観測所は、可視光・赤外線宇宙を観測する施設です。1974年の開設以来、国内外の研究者に利用され、太陽系内天体から、われわれの銀河系（天の川銀河）内の星雲星団、さらには宇宙の彼方にある銀河、銀河団まで、さまざまな天体の観測研究に取り組んでいます。

木曾観測所の主力観測装置は、有効口径105cmのシュミット望遠鏡です。この望遠鏡の特徴は広い視野に渡って、“ぼけ”のない鮮明な画像が得られる点にあり、一度に6度四方の領域を撮影することができます。これは満月にして144個分に相当する大きさです。



シュミット望遠鏡

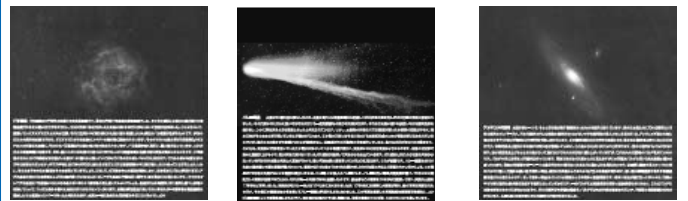


写真乾板の写真。実際の大きさは1枚 35.5cm×35.5cm

従来写真乾板が観測の主流でしたが、80年代後半から、写真よりも感度の高いCCD（電荷結合素子）が次第に天体観測の主流検出器となっています。

天文学研究の歴史の一旦を広く一般の方々に知っていただくために、木曾観測所では保管していたおそらく世界最後のコダック社製未露光乾板を使って、かつて撮影した研究用写真乾板の複製を作成し今回展示いただくことになりました。

また、今回あわせてバラ星雲、アンドロメダ銀河、ハーレー彗星の写真などもパネル化して展示しております。是非、一度ご覧ください。



(担当：渉外本部 曾我)



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

スケート部フィギュア部門

私たちスケート部フィギュア部門は週2回、高田馬場シチズンアイススケートリンクで練習しています。内容はそれぞれのレベルに合わせたジャンプ、スピン、ステップなどです。フィギュアと言えば、今年行われた冬季トリノオリンピックでのトップスケーター達の演技を思い出す方も多い事でしょう。

しかし見ることはあっても習った事があるという方はそれほど多くはないのではないのでしょうか。

フィギュアスケートは決して数居の高いスポーツではありません。事実部員のほぼ全員が大学に入ってからスケートを始めました。最初は立っていることもままならなかった部員も、半年もすれば気持ちよく滑ることができるようになります。

勿論ただ滑るだけではなく、それぞれのレベルに合わせたジャンプ、スピン、ステップを練習し、昨年度のインカレでは2部男子総合3位、アイスダンス優勝（一昨年は2部男子総合優勝）という好成績を残しています。



個人のペースで練習出来るのでバイトや学業との両立も十分可能です。我が部は東大生のみで構成されていますが、同じリンクで練習している他大学のの人たちと仲良くなれたり、また週末にはOB・OGの方がいらっしやって教えてくださったりするなど、よい人間関係が築けます。

この記事をご覧になったのなら是非一度新歓練習にいらしてみてもは？そしてスケートの楽しさと部の和やかな雰囲気味わってみてください。

部員一同お待ちしております。

(スケート部フィギュア部門 大録 誠広)

★★DATA★★

創立：昭和46（1971）年
 人数：20名
 練習場所：高田馬場シチズンスケートリンク
 練習日：月・水
 年間予定：4月 新歓練習
 5月 新歓コンパ 春の関カレ
 7月 淡青会（OB・OG会）
 8月 夏合宿
 9月 秋合宿
 10月 秋の関カレ
 11月 新人戦
 1月 インカレ
 3月 国公立大会
 今年度の戦績：インカレ 2部男子総合 3位
 アイスダンス 優勝
 部長：堀井秀之（大学院工学系研究科教授）
 監督：吉岡伸彦（千葉大学教養部保健体育教室）
 HP：http://www.todaifsc.com/wiki.cgi

ボクシング部

○ リングにかけろ！

2006年3月、日本野球界がWBC優勝で盛りあがったことは皆さんの記憶にも新しいのではないのでしょうか。その日本チームが野球において世界の頂点に輝いたとき、その週の土曜日に競技こそ違え、同じWBCである一人の日本人ボクサー、長谷川穂積が最強の宿敵ウィラポンを倒しボクシング界の誰もが認める世界チャンピオンになりました。私はとても感動しました。

ボクシングといえば皆さんご存知の通り、拳のみで打ち合い、その多彩さや正確さを競い合う競技。しかし、皆さんがどうしても頭に思い浮かべてしまうのはプロボクシングについてでしょう。皆どうしてもアマチュアとプロというと、言葉の響きからこの二つを比べようとしてしまいがちですが、この二つはルールや身につけられるものの違いから、どちらが強いかは計りえないものです。しかしアマチュアとプロは求められているものは違いますが、基づく技術は一緒です。ヘッドギアの着用などで、プロよりも安全に確実に強くなれます。皆さん同じリングの上で強くなろう！

○ 活動

ボクシング部の活動の特徴として、高校経験者の数が少なく、しかも高校経験者に勝つことさえも決してむずかしくないということです。現在我々は関東学生リーグ3部に所属しています。入学試験にスポーツ推薦制度を採用していない国公立大学の中ではかなりの上位となります。目標は3部優勝・2部昇格、国体出場、全日本選手権出場などさまざまです。興味ある方はぜひとも気軽に見学、練習に来てください。
 (ボクシング部 下川 雄生)



★★DATA★★

人数：15名
 練習場所：駒場地区格技場2階
 練習日：月・火・木・金 16：30～19：30
 土 14：30～17：00
 年間予定：5月 3部トーナメント大会
 8月 夏合宿
 12月 国公立戦
 その他 オープン戦 国体予選 全日予選。
 今年度の成績：関東学生リーグ 3部残留
 3部トーナメント 準優勝 安岡
 全日予選ベスト4 金津
 部長：寺崎 誠（海洋研究所教授）
 監督：吉森照夫（弁護士）
 HP：http://todaibox.hp.infoseek.co.jp/

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

農学生命科学研究科・農学部

植物医科学寄付講座設立記念シンポジウム 「植物医科学と環境保全型農業」の開催について

地球上で毎年8億人分の食糧が作物の病気により失われています。一方、野菜工場など超集約的な農業が成長し、家庭園芸を楽しむ人口も増加しています。このため、病気の診断・治療・予防を担う「植物病院」の設立が期待されています。今春「植物医師」養成や「植物病院」ネットワーク構築に向け「植物医科学寄付講座」が(株)池田理化の寄付により設置されました。本シンポジウムでは、人口問題、環境問題、食糧問題など地球規模の問題に深く関わる「植物病」の解決に視点を置き、そこから見えてくる環境保全型農業を推進するにはどのようにしたらよいか、植物医科学の果たす役割を皆さんと共に考えてみたいと思います。多数の方々のご来場をお待ちしております。

■主催 農学生命科学研究科生産・環境生物学専攻

■日時 5月24日(水) 13:30~17:00

■場所 東京大学農学部弥生講堂

■参加申込事前登録制(満席でない場合のみ当日参加可)
詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/topics/kinenshinpo.html>

■プログラム

開会挨拶：會田勝美(大学院農学生命科学研究科長)

基調講演：植物医師の養成と植物病院の設立に向けて
難波成任(大学院農学生命科学研究科教授)

特別講演 植物病理学と環境保全型農業

陶山一雄(東京農業大学 理事・教授)

挨拶 研究科との出会いと講座寄付に至るまで
木崎民生(株)池田理化 社長)

パネルディスカッション

「環境保全型農業の推進と植物医科学の役割」

コーディネータ

根本圭介(大学院農学生命科学研究科 教授)

パネリスト

小川 奎(農業・食品産業技術総合研究機構理事)

生源寺眞一(大学院農学生命科学研究科 教授)

杉山信男(大学院農学生命科学研究科 教授)

田付貞洋(大学院農学生命科学研究科 教授)

西尾 健(農林水産省 農林水産政策研究所長)

松島義幸(キリンアグリバイオカンパニー社長、
JFMA副会長)



お知らせ

お知らせ

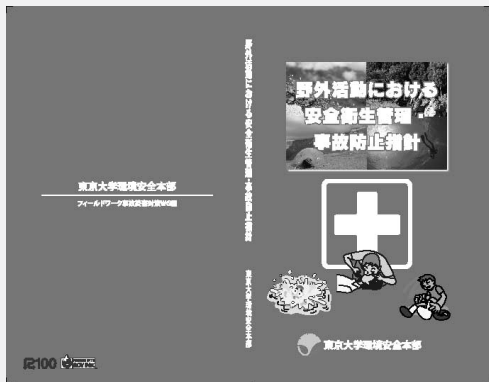
環境安全本部

『野外活動における安全衛生管理・事故防止指針』(冊子マニュアル)が出来ました!

環境安全本部では、『野外活動における安全衛生管理・事故防止指針』という冊子マニュアルを作成しました。現在、本学の部局において、野外調査(フィールドワーク)、野外観測、研究や観測の一部を野外にて行うもの、観測船などによる調査、学生を引率しての野外実習、巡検など、野外における教育研究活動は活発に行われておりますが、その一方で、新しいデータや知見を得るための野外活動には、さまざまな危険が伴います。みずから命を落としたり、第三者を巻き込むような事故が起きる可能性も否定できません。このような状況を踏まえて、『野外活動における安全衛生管理・事故防止指針』は野外活動の初心者にも理解しやすく、かつ携帯するにも便利なポケットサイズの大きさ(182×115mm)でまとめました。平成18年4月1日から施行された「東京大学の野外における教育研究活動に関する安全衛生規程」に基づき、この冊子マニュアルは安全衛生管理体制の不備や準備・情報不足で起こる事故を限りなくゼロに近づ

け、事故が起こった際には、被害を最小限にとどめて、迅速に最善の対応策を講じることが明確に把握できるよう構成しました（前半I～IV章「野外活動に行く前に」、「野外活動中の注意事項」、「もし事故が発生したら」、「補足事項」。後半V章「応急処置」。資料「東京大学の野外における教育研究活動に関する安全衛生規程」を含む）。環境安全本部としては、本学における野外の教育研究活動が、この冊子マニュアルに基づいて、より活発に行われることを期待しています。なお、環境安全本部のホームページのトップから、PDF版をダウンロードすることもできますので、興味のある方は是非ご覧ください！

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/office/anzeneisei/index.html>



お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

第2回室内楽演奏会の開催

教養学部では、新たな企画としてはじまった＜室内楽演奏会＞の2回目を次のとおり開催いたします。このたびは、世界的な名声を博しておられる鈴木秀美氏をお迎えし、バッハの無伴奏チェロ組曲をお楽しみいただきます。どうぞご期待ください。

入場は無料です。ホームページを開設しておりますので、ぜひご覧ください。

■日時 6月8日（木）18:30開演（18:00開場）

■場所 教養学部900番教室（講堂）

■曲目 J・S・バッハ 6つの無伴奏チェロ組曲より
第1番 ト長調（BWV 1007） 第3番 ハ長調（BWV 1009） 第6番 ニ長調（BWV 1012）

■演奏 鈴木秀美

■問い合わせ先 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部オルガン委員会

<http://organ.c.u-tokyo.ac.jp>

お知らせ

大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校体育祭

5月20日に中野区の教育学部附属中等教育学校で恒例の体育祭が行われます。この学校の体育祭の特徴はその企画・運営を全て生徒が行っているということです。体育祭の予行が行われる際も、教員は見守ったり相談に乗ったりするだけで直接声をかけることはほとんどありません。走り回って生徒たちを動かしているのは実行委員の生徒たちです。今年度体育祭実行委員長の加藤尋子さん（5年生）に話を聞きました。

「東大附属の体育祭は1年生から6年生まで、年齢差は大きいけれど仲良く団結して出来るのが特徴です。今年は競技に参加している人もしていない人も楽しめる体育祭にしたいですね。必見の競技はまず、『男子の騎馬戦』。迫力があって、最後の大将戦は緊張感があり、特に面白いです。また、長い棒を3人で立て、その上に旗を立てる『東大連峰』という競技も必見。それから最後に行われる『色別リレー』も面白いですよ。1年から6年まで参加するリレーで、得点が高く逆転も狙えるので盛り上がります」。

お時間のある方はぜひいらしてください。

■開催日時 5月20日（土）9:00～15:00



昨年の体育祭の様子（東大連峰）

お知らせ

低温センター

保安教育『低温講習会』のお知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象にした講習会を下記の要領にて開催いたします。この講習会は高圧ガス保安法で義務づけられている保安教育の一環として行うものです。対象者は、主として今年度入学の修士課程一年生等新たに寒剤を利用し始める学生及び教職員です。研究室の該当者は、必ず出席するようにお願いいたします。なお申し込み方法は低温センターホームページ低温講習会についてをご覧ください。5月19日（金）までに申し込みください。

<http://www.crc.u-tokyo.ac.jp/>

■日時 5月23日（火）15:00～17:00

■場所 武田先端知ビル5階 武田ホール

■講習内容

- 高圧ガス保安法の概要
- 高圧ガス容器の取り扱い方
- 液体窒素・液体ヘリウムの特性と取り扱い方
- 実際の利用手続き、事故例の紹介
- 共同利用装置について

■連絡先 低温センター技官室（内線22862）

お知らせ

情報基盤センター

情報探索ガイダンス 各種コース開催のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では“情報探索ガイダンス”として、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ各種のコースを実施します。5月に開催するコース、スケジュールは下記のとおりです。東京大学にご所属であれば、学生・教職員を問わずどなたでも参加できます。お気軽にご参加ください。

■会場

本郷キャンパス総合図書館1階 講習会コーナー

■定員

12名（先着順。予約不要。直接ご来場ください）

■各コースの内容

テーマ別ガイダンス：毎回1つのテーマについて、検索実習をまじえながら解説するコースです。

【5月のテーマ】

■図書館の蔵書を検索するには？（60分）

東京大学および学外の図書館も含めて、図書館の膨大な蔵書を活用するために、ネットでできる蔵書検索をマ

スターしましょう。リニューアルした“東京大学OPAC”（蔵書目録データベース）の使い方を中心に、図書館の蔵書を検索できるいろいろなデータベースを紹介いたします。

■電子ジャーナルを利用するには？（60分）

電子ジャーナルを利用すると読みたい論文をネットで素早く入手できます。電子ジャーナルにアクセスする方法や代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとりて実際の利用方法を解説します。

■データベースユーザートレーニング

特定のデータベースについて、検索実習をまじえながら解説するコースです。

【5月のデータベース】

■FELIX と CiNii（60分）

FELIX（フェリックス）は日本語論文（雑誌記事索引）、欧文の論文（Swet Scan）、人文社会科学系の欧文の論文（PCI）を検索できる、目次情報検索システムです。CiNii（サイニイ）は国内の論文、学協会誌、大学の研究紀要を中心とした論文情報データベースで、一部のデータは本文にリンクしています。

<5月下旬～6月の予告>

分野別のデータベースユーザートレーニングを計画中です。コース詳細・日程・申込方法などは、決定次第、本紙「学内広報」および下記のサイトに掲載しますのでご覧ください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

◆総合分野

- ・ JapanKnowledge（5/29 15:00-16:30）
- ・ LexisNexis Academic など

◆人文社会科学系分野

- ・ InfoTrac Custom
- ・ ASSIA/LLBA
- ・ Literature Resource Center with MLA
- ・ EBSCOhost
- ・ PsycINFO など

◆自然科学系分野

- ・ ProQuest Agricola Plus Text
- ・ SciFinder Scholarなど

■問い合わせ先

学術情報リテラシー係（22649）

E-mail:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

■Electronic Journals Course

5/22 16:30~17:30

This course covers the fundamental aspects involved when consulting electronic journals. Explanations about the search functions of publishers such as Science Direct, Springer Link and Wiley Inter Science can be tailored to include examples in your specific field of research.

■Web of Science Course

6/20 15:00~16:00

Apart from the usual keyword search functions, this database allows to find:

- cited materials (articles cited by a particular article)
- citing materials (articles citing a particular article)
- related materials (other articles sharing a reference with a particular article)

Search results can be analyzed according to author name, author affiliation, field, and year of publication.

| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|--|------|--|--|---------------------------------------|
| 5/8 | 5/9 | 5/10 | 5/11 | 5/12 16:30-17:30 図書館の蔵書を検索するには? |
| 5/15 | 5/16 | 5/17 | 5/18 15:00-16:00 電子ジャーナルを利用するには? | 5/19 |
| 5/22 English Session 6:30-17:30 Electronic Journals | 5/23 | 5/24 11:00-12:00 FELIX とCiNii | 5/25 | 5/26 |
| 5/29 15:00-16:30 Japan Knowledge | 5/30 | 5/31 | | |

ニュースページ、インフォメーションページへの記事提出要領

「学内広報」は皆さんに送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者をとおして、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 提出先

総務部広報課

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

3. 締切日

原則として毎月第1・3水曜日を原稿の締切日とする（配布は翌々週の火曜日）。ただし祝日等により変更となる場合があるため、HPで発行スケジュールを確認すること。

4. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合プリントのものも掲載可とする。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合はこの限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 既に行われた行事や決定した事項などの報告記事は、「である調」を用いること。
- ② これから行われる行事や募集などのお知らせは、「ですます調」を用いること。
- ③ 句読点は「、」「。」を用いること（「,」「.」は用いない）。
- ④ 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ⑤ このほか、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とするなど、表記の統一のための修正を編集段階において行う。

5. 問い合わせ先

総務部広報課広報企画チーム

TEL : 03-3811-3393 内線22031

E-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

EVENT LIST

| 行事名 | 日時 | 場所 | 連絡先・HP等 |
|--|---|--|--|
| 東文研セミナー Women in Coffee Leadership ～コーヒー産業と女性のリーダーシップ～ | 5月10日(水) 18:00～ | 山上会館 大会議室 | 東洋文化研究所 池本研究室 担当：大城 TEL:03-5841-5877 FAX:03-5841-5899 E-mail:coffee_salon_ioc@yahoo.co.jp |
| CREP月例セミナー 日本企業の開発輸入契約 報告者：久田眞吾（あさひ・狛法律事務所/弁護士） | 5月23日(火)15:00～ | 社会科学研究所大会議室 | 社会科学研究所 CREP事務局 E-mail:crep@iss.u-tokyo.ac.jp |
| 低温講習会 ※24ページ参照 | 5月23日(火)15:00～ | 武田先端知ビル5階 武田ホール | ※申し込み受付は5月19日まで 低温センター http://www.crc.u-tokyo.ac.jp/ |
| 植物医科学寄附講座設立記念シンポジウム 「植物医科学と環境保全型農業」 | 5月24日(水)13:30～ | 農学部弥生講堂 | ※参加申込事前登録制 生産・環境生物学専攻事務 TEL:03-5841-5040 FAX:03-5841-8168 e-mail:unemoto@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp http://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html |
| 教養学部第2回室内楽演奏会 J・S・バッハ6つの無伴奏チェロ組曲より 演奏 鈴木秀美 ※23ページ参照 | 6月8日(木)18:30～ (18:00開場) | 教養学部900番教室 | ※入場無料 大学院総合文化研究科・教養学部オルガン委員会 http://organ.c.u-tokyo.ac.jp |
| CREP月例セミナー 最適通貨圏の形成：Euroと東アジアの場合 報告者：大瀧雅之（社会科学研究所） | 6月20日(火)15:00～ | 社会科学研究所大会議室 | 社会科学研究所 CREP事務局 E-mail:crep@iss.u-tokyo.ac.jp |
| 行事名 | 開催期間 | 場所 | 連絡先・HP等 |
| 総合博物館常設展 「アフリカの骨、縄文の骨—遙かラミダスを望む」展 | 4月18日(火)～ 6月9日(金) | 総合研究博物館本館 | 総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp/ |
| 総合研究博物館小石川分館 驚異の部屋—The Chambers of Curiosities | 3月9日(木)～ | 総合研究博物館小石川分館 | 総合研究博物館 ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp/annex/ |
| 第104回(平成18年春季)東京大学公開講座 「人口」 ※1331号参照 | 4月1日(土)、8日 (土)、22日(土)、5月 13日(土)、20日(土) | 大講堂(安田講堂) | (財)東京大学総合研究会 担当：徳久 TEL:03-3815-8345 FAX:03-3816-3913 http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html |
| 情報探索ガイダンス ※24ページ参照 | 5月12日(金)、18日 (木)、22日(月)、24 日(水)、29日(月) | 総合図書館 1階 講習会コーナー | ※先着順12名、予約不要 情報基盤センター学術情報リテラシー係 E-mail:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html |
| 第33回生研イブニングセミナー 「情報エレクトロニクスの基礎と応用」 | 4月14日(金)～6月30 日(金)18:00～(5月5 日、5月26日、6月2 日を除く各金曜日) | 生産技術研究所 総合研究実験棟 (An棟) | 生産技術研究所 総務課広報企画係 TEL 03 (5452) 6017～8 FAX 03 (5452) 6073 http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/announce/ |
| 高校生のための金曜特別講座 (夏学期) | 4月14日(金)～7月 7日(金) | 教養学部 11号館2階1106教室 | http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/index.html |
| 法学部連続講演会「高齢化社会と法」 | 5月13日(土)、6 月17日(土)、7月 15日(土) | 法学政治学系総合教育棟101教 室 (通称：法科大学院ガラス棟) | icclpbic@j.u-tokyo.ac.jp FAX.03-5805-7143 |



ご意見・ご感想投稿大募集!

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。

投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてください。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

<投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm.u-tokyo.ac.jp

<記入項目>

- ①氏名・所属
- ②連絡先電話番号
- ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル(20字以内)
- ⑤本文(300字以内)

「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください(⑤はなし)。

Contents

特別記事

- 02 平成18年度入学式
- 07 平成18年度大学院入学式

NEWS

一般ニュース

- 14 「学術俯瞰講義」第二弾：「社会の形成」の開講

部局ニュース

- 15 日台文化交流の作文で附属中等教育学校の生徒2名が優秀賞受賞
- 16 教育学部附属中等教育学校 平成18年度入学式行なわれる
- 16 吉野正芳文部科学大臣政務官、スーパーカミオカンデを視察

キャンパスニュース

- 17 平成18年度入学者数、決まる
- 18 平成18年度進学指導担当教員、決まる

コラム

- 20 調達本部です 第7回
- 20 コミュニケーションセンターだより No.16
- 21 Flags運動部紹介 No.13

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 22 植物医科学寄付講座設立記念シンポジウム「植物医科学と環境保全型農業」の開催について

お知らせ

- 22 『野外活動における安全衛生管理・事故防止指針』（冊子マニュアル）が出来ました！
- 23 第2回室内楽演奏会の開催
- 23 教育学部附属中等教育学校体育祭
- 24 保安教育『低温講習会』のお知らせ
- 24 情報探索ガイダンス 各種コース開催のお知らせ

26 EVENT LIST

淡青評論

- 28 ロックンロール

◆表紙写真◆

平成18年度入学式風景（2ページに関連記事）

編集後記

学内広報の一番の売りと言えば、淡青評論。短いながらも読み応え十分のエッセイばかりですね。今回の坂井先生の作品にはなんと、レニー・クラヴィッツが登場！ 学問の話からロックスターの話まで……この幅の広さが東京大学の多様性を象徴しているのです。いつかは淡青評論をまとめて本にしたいと考える今日この頃。皆さん、まとめて読みたいと思いませんか？

(し)



七徳堂鬼瓦

ロックンロール

菊地成孔と大谷能生の「東京大学のアルバート・アイラー」を読んでいて、レニー・クラヴィッツのことをロックにおける「新古典主義」という位置づけで紹介しているのが目についた。アルバム「ママ・セッド」をはじめて聞いたところ、たしかにビートルズをはじめ、60, 70 年代の音楽の匂いがした。違っていたのは、より端整で、そつのない音楽になっていたことだろうか。

これは、音楽において、ジャンル化、アーカイブ化、伝統化が進んできたことを述べているくだりに書かれている。どんどんと手法や技法が細分化し、マニエリスム化していくこともある。技法上の蓄積が山のようにあって、あらゆる場面に的確に音を配置していくことができる。

よくできた音楽ならそれでいいという思いもあって、クラヴィッツの音楽も、僕は好きなのだが、いっぽうで、ロック・スターのイメージとは違うという感傷もある。ロックには、古いものを駆逐する、新しい音／価値観の提示を期待してしまうのだろうか。だが、時代が進んで、新しいことを見つけ出す余地が狭まってきたならば、これは難しい。

科学者の代表はと問われるならば、僕にとっては、小さいときのすり込みもあって、数学も語学も苦手な音楽が好きなアインシュタインだ。だけど、そんなことも言ってもらえない。教育は重要な職務だから、きちんと数学を理解して優秀な学生に教えなくては。

それでも、ほんとうは、優秀な人には、たくさんアーカイブ群を効率よく仕舞い込んでいつでも的確に取り出せることよりも、僕が想像もできなかったような新しい価値観を提示することを優先させてほしい。だから、僕なんかよりも優秀に違いない東京大学の学生の皆さんに向かって、こんなことも知らないのかなんてことは、ほんとうは、言いたくないのだ。

坂井秀隆（東京大学大学院数理科学研究科）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1335 2006年4月26日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>